

ブータンにおける多文化共生研究プロジェクト

宮本 久義

インドと中国のあいだに位置するブータン王国は、近年、国王夫妻の来日や、GNH（The Gross National Happiness：国民総幸福度）という言葉によって、日本人にもよく知られるようになった。しかし、最後の秘境と称されることから伺えるように必ずしも交通の便がよくないことから、その実態・実情はよくわかっていない。また、国民総幸福度もスローガンのみが独り歩きしているという指摘もしばしば聞かれるところである。このような現状から、多文化共生社会の思想基盤研究を目的とする本センター第3ユニットでは、ブータンの現地調査も兼ねて、現地へ赴き研究集会を開催する企画を立てた。参加者は、宮本久義研究員、永井晋研究員、橋本泰元研究員、斎藤明客員研究員（東京大学大学院教授）、井上忠男客員研究員（日本赤十字秋田看護大学教授）、堀内俊郎研究助手、三澤祐嗣 PRA、の7名で、大半がインド思想、仏教学、共生思想の研究者である。

現地調査に先立って、ブータンの文化人類学的研究を行っている専門家からブータンの現状を聞く機会を2回設けた。文化人類学者をお招きしたのは、仏教学や宗教学とは異なる視点からのブータン像をお聞きしたかったからである。

第1回目の研究会（2012年2月20日）は、脇田道子氏（慶應義塾大学）に、「辺境のツーリズム：ブータンの近代化と牧畜民ブロクパのアイデンティティの行方」というテーマでお話しいただいた。ブロクパ（Brokpa）と呼ばれる少数民族の人々が住むブータン東部のインドとの山岳国境地帯にある二つの谷、サクテンとメラは、長い間、外国人の訪問が制限されていたが、2010年9月にツーリズムが解禁された。脇田氏は、急速に進行するこの地域のツーリズム開発に焦点を当て、「伝統とモダニティ間の緊張」はこの地域においても例外なく強まっているという。今後、ブロクパが自文化見直しの方向へ動くのか、あるいは一般のブータンの人びとへの同化に向かうのか、ブロクパ出身の教育を受けた「民族エリート」が新たな道を開くのか、彼らの今後は注目に値すると氏は締めくくられた。

第2回目の研究会（7月4日）は、宮本万里氏（国立民族学博物館）に、「ブータン、幸福社会という国づくり：国民の属性と境界画定のプロセスから」というテーマでお話しいただいた。氏は、中国とインドという二つの大国に挟まれながら、チベット仏教を国教とする主権国家として生き残るために、ブータンの為政者たちがどのようにして現在のブータン像を作り上げていったのかを、3期に分けて解説された。第1期は1950年代から60年代で、初の国籍法が公布され、領土内に定住する農牧民をほとんど区別なく包摂していった。第2期の1970年代には、国内の「異民族」間の婚姻を奨励し、国語や国史の共有を進めるなど、血と文化をとおした国民の均質化がはかられた。第3期となる1980年代から90年代は、そうした「国民像」の実体化を試みるとともに、「他者」を明確に同定し排除しようとする他者排除の時代となっていったという。国際的にも非難を受けた「ネパール系住民」の難民問題もこの時期の出来事である。しかし、この時期からブータンは、グローバルな環境主義の潮流に応じつつ、自然環境保護への傾倒をみせはじめ、政府は「すべての生き物に対する憐れみ」を求める仏教の思想を根拠としながら、自然を守り育てるブータン人という国民像を構築していったという。しかし宮本氏は、フィールドワークから得られた具体的な事例をもとに、欲望を抑制し、「足るを知る」、従順で幸福感の高い国民という国民像は、様々な情報規制と開発抑制政策の下で政府によって描かれたものであり、当然ながらすべての国民を代表するわけではないことを指摘された。

以上の2回の研究会をふまえて、第3ユニットでは、8月23日から30日にかけて、「現代社会におけるブータ

ン仏教]、「国民総幸福度に対する仏教の貢献」、「アジアにおける仏教の役割」を調査テーマに掲げ、ブータンにおける多文化共生研究集会・現地調査を行った。

2日間行われた英語による研究集会では、ブータン側からは、ティンブーのタシチョ・ゾン（国王のオフィスであるとともに、ドゥク・カギユ派を中心とするブータン仏教の総本山でもある寺院）からロペン・ゲンボ・ドルジ（Lopen Gembo Dorji）およびロペン・ソナム・ボンデン（Lopen Sonam Bomden）の両師に、発表いただいた。特にゲンボ・ドルジ師は、ブータン仏教を統括する中央僧団（Central Monk Body）の事務局長（Secretary General）の要職にあり、ブータン仏教の歴史的背景について詳しいお話を伺うことができた。また、師の属するマハームドラー（大印契）の伝統では、止（シャマタ）と観（ヴィパシユヤナー）が重視されるとの説明があり、呼吸に集中する瞑想法である数息観をみなで行った。日本側からは、宮本研究員が、今回の研究集会の趣旨である多文化共生思想についての解説を行い、さらに斎藤客員研究員が「宗教と平和—仏教を中心として—」、堀内研究助手が無著（アサンガ）の『撰大乘論』における唯識説について発表を行った。また橋本研究員、永井研究員、井上研究員も、それぞれ、多民族社会における共生、現象学と仏教、人道と共生という観点から発表を行い、三澤PRAも日本内でのブータンに対する関心の高さなどを紹介し、質疑が行われた。

今回の研究プロジェクトでは、昨今「幸福の国」として注目を浴びているブータンの実情を見極め、多文化・多宗教の「共生」への知見を得るといふ実地調査も大きな主眼の一つであった。視察・調査を行ったのは首都ティンブー、古都プナカ、国内唯一の空港のあるパロの3か所であり、すべて西ブータンに限られたが、期間中、多くのラカン（寺院）、ゾン（城塞の意。現在では役所・寺院）、尼僧院、国立僧学校を視察することにより、その点についても多くの成果が得られた。また、チベット仏教を国教とするブータンでの現地調査は、「国家と宗教の共生」、「宗教と幸福」などさまざまな課題を考える上でも多大な示唆が得られた。